

最近の動向：震災時の障害者支援について

発表：加藤俊和（日本盲人福祉委員会）

<要約>

東日本大震災で視覚障害者を中心に支援ボランティアを行っている。PICに関連して言えば、避難誘導が大きな問題である。被害の状況や地形を考え、全体に大まかな避難の方向を示すことの重要性を感じた。黒地に白で、事物の輪郭が明確なPICは視認性が高いので、見えにくい人にとっても、十分な配慮をすれば有効と考えられる。

発表：小林美津江（大阪府立金剛コロニー）

<要約>

日本PIC研究会、知的障害・自閉症児者のための読書活動を進める会などに所属する3名が日本コミュニケーション障害学会の補助金を受けて、災害時のコミュニケーションボードを作製した。東日本大震災の現地でコミュニケーションに障害を持つ人達が混乱していることが作製のきっかけとなった。使用方法は、上段の動詞や形容詞のPICと下段の名詞のPICを組み合わせて示し、コミュニケーションを図るものである。現在、被災地の必要な人に配布の準備をしている。また関係の機関にも配布している。

実践事例①

言語理解の向上と代替コミュニケーション手段の獲得を目指した指導～自己の理解と行動調整、心理的な安定に向けて～

発表者：中美子（奈良県立奈良養護学校）

<要旨>

小学部の児童（肢体不自由、構音障害）は、音声言語によるコミュニケーションが難しく、身振りによる会話をしていた。伝わりにくい時には、自傷行為が目立った。自立活動の時間を中心に、PICシンボルによる代替コミュニケーション手段の獲得を目指した。児童の車いすのテーブルに直接シンボルを貼り、いつでも使用できるようにした。その結果、語彙数の増加や、シンボルとひらがなを組み合わせた気持ちの伝達が見られた。また、自発的に人

と関わること、情緒や行動の自己調整、集中力、セルフエスティームの向上にもつながった。

実践事例②

作業療法導入が困難な症例に対するAACの実践

発表者：善利成臣（大阪府障害者福祉事業団 重症心身障害児者施設すくよか）

<要約>

自閉症の障害を持つ児童に4年間、食事動作訓練を行うための作業療法を取り組んできた。当初は、訓練の見通しが持てず興奮や自傷行為があり訓練室に移動が困難だった。写真カードを使用し課題と部屋がマッチングするよう繰り返し、訓練が開始できた。大好きなスヌーズレンを最後に実施した。自己選択した課題を行うようにし、その後写真カードからPICに移行した。取り組みの結果、カードを要求するなどコミュニケーションが取れるきっかけとなった。食事動作訓練が進み食事の自己摂取量が増加した。

実践事例③

知的障害生徒への発音指導に関わるPICシンボルの活用

発表者：永野建一（京都市立東総合支援学校）

<要約>

早口で不明瞭な発音のため繰り返しが多い、集中力や自信がないと思われる中学部の生徒が対象である。PICシンボル探しゲーム（円周上にPICシンボルを貼ったボードで指示されたものを探す）で集中力と自己肯定感を育てた。また、言葉の表出速度練習機（PICシンボルと平仮名の文字カードをLEDの点灯速度に合わせて発音する）で毎日練習をした。その結果、日常場面でも話し方を意識し、繰り返しが減り、聞き取りやすい会話になった。今後も成功体験を重ね、人と場の般化をしていきたい。